

→建礼門院徳子と後白河法皇が歩いた江文峠を辿る

2022.11.13 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 574 回 参加報告

■寂光院

聖徳太子が父・用明天皇の菩提を弔うために開創したという寺伝もある。相当の古刹だ。境内は「汀の池」、千年の「姫小松」、苔むした石などがあり、静かな佇まいである。樹齢千年の「姫小松」は『平家物語』灌頂の巻に「池のうきくさ浪にただよい 錦をさらすかとあやまたる 中嶋の松にかかれる 藤なみのうら紫にさける色」の松と伝えられている。この名木は平成 12 年に本堂の焼失（平成 17 年 6 月再建）とともに火災受難により枯死したが、奥深く哀れに美しい当時の余韻を今に残している。（拝観のしおり「京都大原 寂光院」より抜粋）

■平家物語の終章

未亡人建礼門院徳子は 30 歳で母と子を亡くし、母・時子の遺言に従い、平家一門の菩提を弔い寂光院で余生を過すのであるが、その彼女を、江文峠の同じ道程を辿り、後白河法皇が訪れた。

が、寂光院の本堂正面の山に花摘みに行っていた建礼門院は、戻ってきても、はじめ法皇に会おうとしなかった。その時の彼女の心に帰来するものは何であったろうか？ しかし、仕えていた阿波内侍の取りなしで法皇と対面した彼女は、今は絢爛な生活とは違い母と我が子を弔う立場であることを涙ながらに語るのであった。

そして「徳子はきっと仏の世界で往生成仏であろうな」という予感を法皇にも悟らせて『平家物語』は終わっているとのこと。

この章は冒頭の語り「祇園精舎の……」と対をなす章ではなかろうか。平家物語のテーマを一層、浮かび上がらせる結びだと思ふのである。

■しば漬けのお店

横井先生が建礼門院庵跡を背に締めくくりに改めて、建礼門院が法皇と対面した時の様子をお話下さり解散となった。

寂光院の受付を下がったところに『翠月』という漬物屋さんがあり、筆者も、しば漬けと梅干しを買って家人への土産とした。なお、翠月は大正年間からのお店で「建礼門院が花を摘んでいた翠黛山(すいたい山)の翠と、その山に掛かる名月から名付けた」と店の女亭主が話してくれましたこと、並びに店のしおりに「建礼門院さまに 里人が献上した夏野菜を塩漬けにしたのが しば漬けの起こりです」と書いてありますことを、最後に申し添えます。

スタートの時、ちょっとしたバス乗車の運行トラブルに見舞われましたが、そのお陰で市原界限も小体験できた思い出に残る日になりました。横井先生、いつもながら、ありがとうございました。

<報告／石元英雄／11.19 記>